

JM 台木を利用したリンゴ低樹高栽培技術 「側枝形成法」

リンゴ栽培では、栽培従事者の高齢化に伴い、圃場作業の省力化、軽労化が求められており、低樹高栽培技術への期待が高まっています。(独)農研機構果樹研究所では、リンゴ栽培における省力化のための技術情報として「JM 台木を利用した低樹高栽培技術『側枝形成法』」を刊行いたしましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. JM 台木を利用したリンゴ樹において、定植時に地上 1 m で主幹を切り返し、発出した側枝のうち主幹延長枝と競合する上位側枝を誘引して発出角度を鈍角化します。
2. 冬季剪定時には、地上 2 m の芽のない部位で主幹延長枝を切り返します。地上 1 m までにある車枝状側枝を残すことで、主幹上部の生育を抑制します。また、地上 2 m 付近に強い側枝を置かないことで、主幹の適度な心負け状態を維持します。
3. 定植 2 年目以降、摘果時期に主幹上部の新梢を手でかき取り、新梢発生を抑えます。
4. 若木から成木期にかけてたくさんある車枝状側枝を間引き、最終的に 3~4 本にします。
5. 低樹高栽培の「ふじ」では JM1、JM7、JM8 のいずれの台木との組合せでも、定植 7~10 年目の 10 a 当たり (67 本/10 a) 平均で 3 トン以上の収量が得られます。
6. 地上 1~2 m の部位に結果枝を置くことにより、作業全体が楽になります。定植 10~11 年目の「ふじ」において、低樹高区では対照区よりも摘花・摘果、着色管理、収穫、整枝・剪定の各作業に要する時間がそれぞれ 20%以上短縮されます。

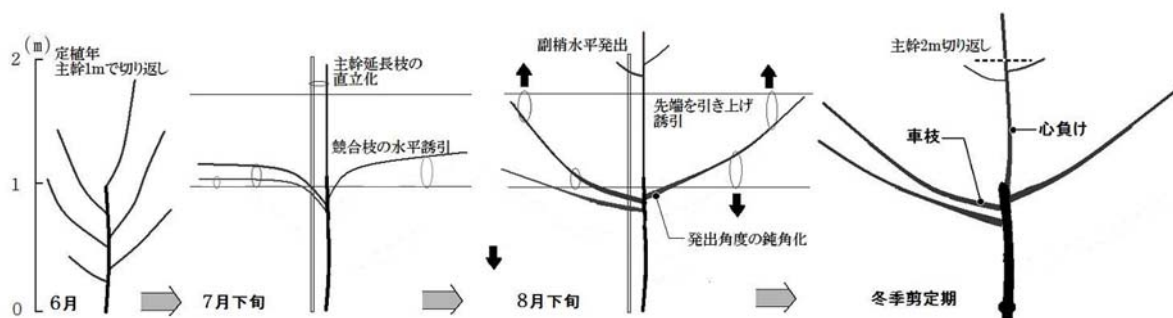


図: 低樹高栽培のための側枝形成法

☆ 活用面での留意点

1. トレリスを用いた事例だけでなく、1 本支柱の場合でも適用できます。
2. JM 台木はネズミの食害を受けやすいため、殺そ剤の投与や幹周りの清耕などの対策を取る必要があります。
3. 多雪地帯では低樹高樹形の適用が困難です。
4. 詳細については、(独)農研機構果樹研究所リンゴ研究拠点(電話: 019-641-3164)にお問合せください。



写真: 定植8年目の「ニュージョナゴールド」/JM7